

調査報告

トロス司教座聖堂発掘報告(二〇一二) — 建築上の所見を中心に

浦野 聡

深津 行徳

キーワード

古代末期、ビザンツ、教会聖堂、レリーフ、柱頭

二〇一二年の夏シーズン、トロス司教座聖堂発掘チームは、七月二五日に身廊部の発掘に着手した。八月二日までアプシスにいたる瓦礫を、昨年同様、北側翼廊と身廊を繋ぐ内部戸口の敷居石レヴェル(四七二・七五五m)まで除去したのち、同日から五日にかけ、南側側廊の西入り口から約一五mの位置までの瓦礫、および南側側廊外壁に開けられた通開口にいたる聖堂外側通路の瓦礫を、いずれも身廊と同じレヴェルまで除去した。昨シーズン同様、このレヴェルより上からは生活痕は見いだされなかった。なお、聖堂外側の瓦礫除去の結果、二〇一〇年度にその痕跡が見

つかっていた聖堂南側の構造物は、聖堂自体と同じく東側にアプシスを持つことが確認されたことから、聖堂南側廊に沿って外構に付設された小礼拝堂であったと推測される(写真1・1・2)。現況写真にも明らかなように、聖堂の躯体に比して崩落の度合い著しく、また、構造的にも聖堂の躯体に組み込まれていないから、後代に付設された施工強度の劣る建築物であったと考えられる。なお、八月一八日まで継続して発掘後の内構の測量を行う一方、発掘された有意の石材一六〇点強の写真による記録を行った¹⁾。さらに八月七日には、イタリア、ラヴェンナから、研究協力者



写真 1-1 付設礼拝堂（現況。東のアプシス側から）



写真 1-2 瓦礫を取り除いて現れた付設礼拝堂のアプシス（8月3日撮影）

のクラウディア・テデスキ氏を招き、北側翼廊部の床面モザイクの試掘を行った。^②

以上の結果、建築上の所見として以下を得た。

1 腰高障壁 二〇一一年、北側廊側、すなわちその北面のみが開かれた北の列柱台（NC2～7）と柱台間の腰高障壁は、今シーズン、身廊側、すなわちその南面が露わになった。とりわけ、発掘初日にNC2からNC4にかけて掘り出された面には、北面では確認されなかった漆喰が、柱台から腰高障壁にかけて分厚く（一～二cm）施されているのが見いだされた（写真2）。漆喰には植物の根が入り込んでおり、それに付着した土を取り除くと、漆喰そのものが石材面から剥落してしまいう危険が生じたので、除去が困難に思われたNC5以降の番号の柱台とその間の障壁については土を付着させたままにし、漆喰塗装の存否について確認しなかった。とはいえ、NC1とその西側の腰高障壁が同じく身廊側に漆喰跡を残したまま出土したことにも照らし、柱台から腰高障壁にかけて、もともと全体に施工面を隠す化粧漆喰がふんだんに施されていた可能性は高い。昨年報告したように、北面では幾つかの柱台と障壁には直接、石の表面に煤が付着し、火の使用、も

史苑（第七三巻第二号）



写真2 NC3とその東側（右）と西側（左）の腰高障壁南面（7月25日撮影）

しくは火災の痕跡が認められた。こうした痕跡は南面では見いだされなかったが、北側廊と身廊を繋ぐ内部戸口ND2周辺には、昨年その北側で発見した燃焼物の痕跡が連続していたのを確認した。

新たに発掘された南側列柱台(SC2^④7)と腰高障壁については、SC5とSC6の間でほぼ全部、SC6とSC7の間で柱台の高さの半分から全部、腰高障壁を取り除いた形跡が見いだされた(写真3-1)。また、それ以外の障壁についても、とりわけ上部の損壊の度合いが北柱列の障壁のそれに比べて大きい(写真3-2)。さらに、そうした損壊・破損の大きさに応じたものであるうか、いずれの柱台、障壁にも漆喰の痕跡は認められなかった。施工については、残存部が少ないので確実な所見は記しがたいが、積まれた礫石が小さめで、モルタルの使用も少ないように見受けられる。施工法については、来年度以降にあらためて評価したい。

2

内部戸口 二〇一〇年には列柱SC1とSC2の間と、NC1とNC2の間に側廊部と身廊部を繋ぐ戸口(それぞれSD1とND1)が開けられているのを、また一年にはNC7と側廊・翼廊・祭壇部の結節点に



写真3-1 身廊南半部 (7月28日撮影)



写真3-2 南側廊(手前)から身廊・北側廊(奥)

積まれた直方体の石材から成る支柱(北大黒柱NP)の間にも同様の戸口(ND2)が開けられているのを見いだしていたが、今シーズンは、SC7と、南大黒柱SPの間に内部戸口を発見した(写真4)。柱台かと



写真 4 身廊・翼廊間の南側内部戸口 2 (SD2)

思われる切石が置かれるなど、ND2と造作が異なるが、当初から違っていたのか後代に変更されたのかは現在のところ不明である。南翼廊の発掘を来シーズンに持ち越したので、詳細は次回報告に譲る。

3

外部戸口 側廊部南壁東寄り、丁度北壁に開けられて

いた外部戸口（NOD）と対称の位置に外部戸口（SOD）を発見した。この戸口（幅二一〇cm）は、北側外部戸口と同じく後代に塞がれた痕跡を残しているが、後者が聖堂躯体に劣らぬ施工技術で厚さも躯体壁と等しく塞がれていたのとは異なり、全体幅の五分の二ほどを残して躯体壁の約半分の厚さで塞がれていた（写真5）。腰高障壁がSC5と7の間で取り除かれていること、また後述のようにSC6と7の間には階段状になるよう円柱が寝かされていたことにも照らし、聖堂使用の後期から末期に、この戸口が身廊部への出入口口として機能していた可能性がある。ただ、こうしたことを確証するためには、南側廊部を掘り進めることと、この戸口を敷居まで掘り下げることが必要になる。来シーズンの課題としておきたい。

4

仕切り構造体

身廊の発掘は、身廊部と南翼廊部を完全に分かつ、残存高八〇〜一一〇cmの構造体（PS2）の存在を明らかにした。南翼廊側が掘り出されていないので厚さは分からず、もともと、現況においてそうであるような身廊と南翼廊を分かつ用途の壁体であったかは分からない。ただ、この構造体は幾つかの煉瓦・



写真5 南側廊の外部戸口（SOD）

スポリア材積みの部分に分かれているようである（これらを暫定的、かつ便宜的にPS2・1・6〔7〕と呼んでおく。写真6）。このことは、当初、北翼廊で見られたような幾つかの小祭壇（と我々が名付けた）状の構造体が設置されていたところ、のちにその隙間に煉瓦を積み、南翼廊との通行を完全に遮断する仕切り壁に転用したことを示唆しているのかもしれない。実際、この構造体の施工技術・精度は低く、北翼廊の小祭壇のそれとよく似通っている。

そのほか、この構造体について特記すべき点はアプシス脇の聖堂東壁面（そこには朱と黄の縁取りを持つフレスコが描かれているのが発見された（本号田中報告参照）から連続してこの構造体の身廊側全体を覆っていたと考えられる化粧漆喰の跡が広範囲にわたって遺存し、そのうち二箇所はそこに描かれた朱・緑・黄・青の幾何学模様のフレスコ画の痕跡を明瞭に残していることである（写真7・1、2）。このフレスコは、アプシス隣接壁面との接合部分からこの構造体の左端を写した写真7・1に、幾何学模様のフレスコの上に八〇mmほどの厚さで白漆喰が重ねられているのが見て取れるように、後代に無地の白漆喰で塗りつぶされていた。すなわち、この構造体は、少なくとも二度に



写真6 身廊と南翼廊を分かつ構造体 (PS2)



写真7-1 PS2のフレスコ画 (1の部分)

わたり漆喰塗装を施されるだけの期間にわたって維持されていたものと考えられる。白漆喰は、湿気を含んで脆く、かなりの部分が落ちてしまっているが、PS2・4(5)の部分に残っている六〇cm×九〇cmほど

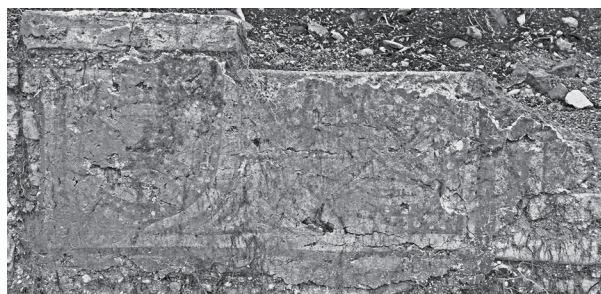


写真7-2 PS2のフレスコ画 (3の部分)

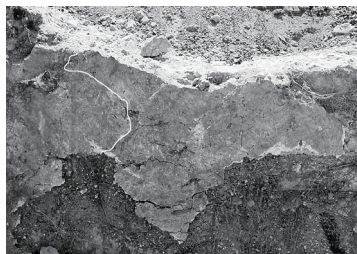


写真7-3 PS2のフレスコ画 (3の部分の続き。現在は白線より右の箇所が失われてしまった)

の硬化した漆喰はこの白漆喰の一部かもしれない。その一方で、そのわずかな部分に、かすかに朱の彩色痕も認められるので、フレスコを持つ漆喰と一連のものの可能性もある。

他方で、身廊部と北翼廊部の間には、昨シーズン、その北側が掘り出されていた小祭壇、もしくは仕切り構造体の遺構が発見された(PS1)。崩落・損壊の度合いが激しく、この構造体の元々の用途を特定することとは難しいが、丁度南の仕切り構造体PS2と対称の位置にあること、PS2と同様に精度の低い工法で施工されていることからPS2と何らかの用途上の関係性を持って、少なくともその一部とは同時期に施工された可能性が高いように思われる。

5

説教壇

身廊の入り口からもアプシス基部からも一二・五五m、北側柱列と南側柱列から三・三〇m、すなわち身廊全長と全幅の丁度真ん中の位置に、長さ四・一〇m、幅一・五〇mほどの、説教壇(Aambo)の基壇を見いだした(写真9・1)。また、その周囲には、説教壇階段の側板・欄干の部材を構成した可能性がある、それぞれ鋭角状と台形状の粹線の浮彫の入った石板を発見した(24、24a・b・25、25a・c。写真9・2

〔4参照〕。いずれも鑿痕を残した粗い仕上げであり、化粧漆喰仕上げを施されていたものであるう。

鋭角の浮彫と尖頭部を持つ石板24とそれに属する断片24a・b(合わせて七四cm×五〇cm、厚さ一〇cm)が、写真9・5・7の例に見られるような、説教壇の階段欄干の台形側板先端部、すなわち説教壇上の方形側板に接する箇所断片であったことは間違いないと思われる。24cと24dは、材質や仕上げから見



写真8 身廊から北翼廊(画面右下に見えるのが身廊と北翼廊の境界にある仕切り構造体もしくは小祭壇〔PS1〕)

てこの石板の一部であった可能性が高く、そこには十字架の浮彫が見られる。^⑥一方、台形状の枰線（とそれに囲まれた円と六腕星）の浮彫を施された石板25（八四cm×八二cm、厚さ一〇cm）は、裏面にわずかに古い碑文を残している（本号師尾報告参照）転用材であろう。24の石板の鋭角が作り出す斜線の角度に比べ、台形枰線浮彫の斜辺の傾斜は緩やかであるように見えるが、24を真上から撮影した写真（田中報告参照）を見ると、概ね一致しており、24と同じく、説教壇の階段欄干を構成したと考えてよさそう。この傾斜が階段の傾斜を示すとすれば、階段の傾斜は写真9・5・7の類例に比べて緩やかであったとみられる。ただ、台形枰線浮彫の意匠が端（台形の長辺側）で裁ち切れているので、これに続く側板があったものと思われ、その場合には、24がその一部であるような側板と合わせて二枚の台形石板で説教壇階段の片側一面の側板を構成していたものと考えらるべきだろう。

現在のところ、これら以外に説教壇に属した可能性がある部材は、25の周辺で見つかった縁取り浮彫を持つ小断片25a・cのみである（写真9・4参照）。側板・欄干は厚さが一〇cmほどに過ぎないから、現在の発掘後地表面下に他の部材が埋まっている可能性はあるが、

24は北側列柱台NC5の近く、25はNC6と7の間で見つかったというように、かなり散乱の度合いが著しいこと、また、発掘前地表面は、身廊の軸線に沿ってすり鉢状に低くなっており、説教壇の基壇上にはわずか二〇cmほどしか堆積が残っていなかったこと等に照らして、この周辺でこれ以上主要部材の遺存を期待することは難しい。すなわち、本来、側廊部に比べて重厚な上部構造や内部装飾を持っていたはずの身廊部で、その部分に薄い堆積しかみられないならば、崩落時、あるいは二次利用時以降、そこから石材の多くが取り去られたり、移動されたりしてしまっている可能性が高いからである。とはいえ、説教壇の形をより確かなものとして復元するには、さらなる発見が不可欠である。



写真 9-1 説教壇 (Ambo) の基壇



写真 9-2 説教壇階段欄干部材 (25)



写真 9-3 欄干部材 (24、24a-e)



写真 9-4 欄干部材（25、25a-c）

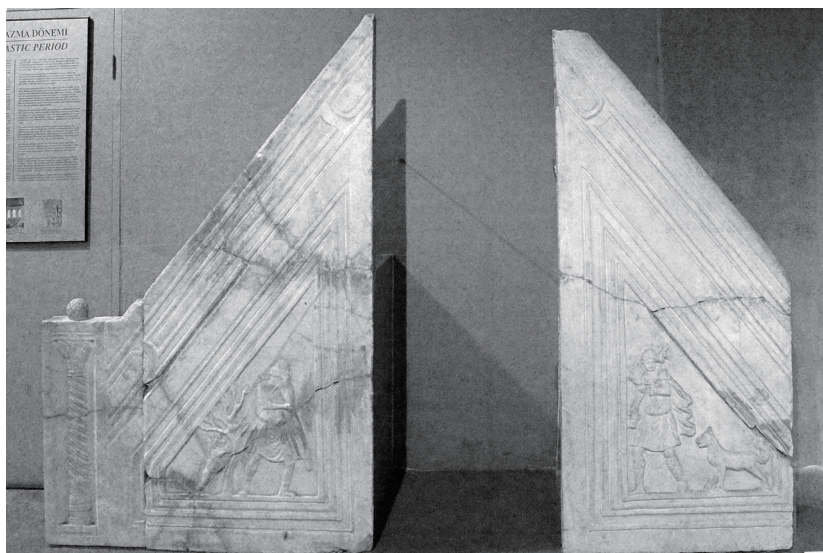


写真 9-5 説教壇階段欄干部材（アイドゥン。イスタンブル考古学博物館）



写真 9-7 復元された説教壇 (コンスタンティノポリス。ハギアソフィアの前庭)



写真 9-6 説教壇階段欄干部材 (エフェソス。セルチュク考古学博物館)

6 円柱と柱頭

円柱については、大別して、A 聖堂躯体を支えた円柱、B 身廊部と祭壇部を分かつテンプロンを構成した円柱、C 祭壇部内の調度としての円柱、D その他用途の不明確な円柱の四種類を見いだした。A・B については、柱頭もそれぞれに対応するものが見つかっている。

A 躯体の円柱と柱頭 昨シーズン⁸⁾北側側廊で七件を確認できたフルートを施されていないこの種の円柱で、身廊から見つかった柱体は、一昨シーズンに発掘前地表面に一部を確認できていたものを中心に、計六件である (B 2・1 a・b、B 2・3 a・b、B 4・10、B 6・5 a・b、B 8・1 a・b、B 8・6 a・b⁹⁾)。これらは、いずれも、下部でおよそ五二 cm 以上、上部で四五 cm ほどの直径と四〇〇 cm を超える長さを持った柱の一部であったと考えられる。三五四 cm を残す B 4・10 とそれに匹敵する 8・6 a・b・65 を筆頭に、二〇〇 cm 強の B 6・5 以外は、三〇〇 cm 内外残っている。柱頭は、昨シーズン身廊入り口近くの地表面下に一部埋没していたが、翌シーズン (11 今シーズン) の発掘を見越してトラクター通行の妨げにならないよう掘り上げて移動しておいた、ほぼ完形をとどめる B 2

6と、底部の欠けたB2・7の二つのコリント式柱頭がある。そのほかは、説教壇の二m西にやはりその一部を見せていたB4・9(Ⅱ17に番号付け替え)とその断片群46、46a・cが見つかり、身廊で発見されたコリント式柱頭は計三件となった(写真10)。

南側廊については、まだ完全に発掘を終えていないが、いずれも一昨シーズン、地表面で確認し、暫定的な番号付けを施していた円柱を、あらためて一部番号を付け替えた上で、計四件のそれらとして確認した。すなわち、一昨シーズンに移動したC2・2、C4・3a・c(最大の部材の長さ二〇〇cm弱)、C5・2a・c(最大の部材の長さ三三〇cm)、かつてC4・3eとしたが、C4・3の一部ではないことが判明した162(三三二cm)である。これらの上に戴かれたコリント式柱頭は、155と159の二つが見いだされた。それぞれC4・3a・cと162の上に置かれていたものと考えられる。162の円柱は、フレスコ画を持つ南外壁との際にその頭部を置いて倒れており、聖堂の身廊部と南側廊部が倒壊した際のままの姿をとどめていると思われる。最下点は発掘を止めた層位より三五cm近くも低いレヴェルを示した(四七二・四一三m)。そのレヴェルでもなお床面は見えておらず、発掘を止めた層位から一〇cmほ

ども掘れば床面モザイクに行き当たる北翼廊より、ずっと低い床面を持つものかもしれない。¹¹⁾

B テンブロンの円柱と柱頭 南北の大黒柱の間を中心に、もともとは躯体の円柱に匹敵する太さ(五〇cm強)と、それより一mほど短い三m×三・五mの長さを持つと考えられる、フルートのない柱体が、折り重なって倒れているのを見いだした(写真11・1・2)。これらの柱体を移動してみると、下には幅四七cmほどの敷石が、身廊の軸線に対して直角に横切る形で敷かれていたことが明らかになった(ただし北端は七〇cmほど、南端は三〇cmほど、身廊の全幅に足りない)。大黒柱のアブシス側面を結んだ線より一mほどアブシス寄りの線上である。柱を支える柱礎は見いだされなかった一方、この敷石には奇妙な直径六〇cmほどの半円が四つ半、七〇cmから九〇cmの間隔を開けて彫り込まれており、断面の形状は四cm程度の均一の深さを持つ浅いパン状のそれから最深部一八cmにも達するボウル状のそれまで、まちまちであった(写真11・3)。円柱は復元してみると六件に上るが(51・51a、52・52a、53・54・54a、57・75(・76?)、77・77a、¹²²⁾半分か支えを持たない半円状の彫り込みにそれがはめ込ま



写真 10 コリント式柱頭とその破片 (17と46)

のそれであったかもしれない。半円の彫り込みの意味は依然として不明だが、円柱の柱礎ないしスタイロベイトが、この敷石の手前(西)側か奥(東)側のまだ掘り出されていない一段下のレヴエルに見いだされる可能性はある。これら円柱群は、一列に並べるにはマシヴに過ぎるから、その幾つかが祭壇部天蓋を支えた柱であった可能性も検討に値する。いずれにせよ、柱はよく残っており、ある時期一斉に倒れたまま、放置されたものであることを推察させる。

これらの柱の上に載っていた可能性のある柱頭としては、イオニア式のそれがひとつ(56)と簡素な装飾のそれがひとつ(41)、ビザンツ的意匠を持つものが六件(58、60・60a、62、63、129、145・145a・b)見つけた(写真12、13、14参照)。意匠については田中報告に譲るが、計八件で、柱の数に合わない。イオニア式のものは高さ二〇cm前後、底部の直径三五cm、簡素な装飾のものは高さ三五cm、底部の直径三〇cm前後といずれも円柱のサイズと合わないが、写真11・1に見られるごとく、イオニア式のそれはテンプロンの円柱の間で見つかっているし、また、簡素な装飾のそれも後述のアーキトレヴ(IIエピスタイル)の近くで見つかっているの、それらと無関係とは考え



写真 11-1 身廊部と祭壇部の間に倒れていた円柱、柱頭、アーキトレーフ
(7月27日撮影。北半部。アプシス側から入り口側に向かって。)

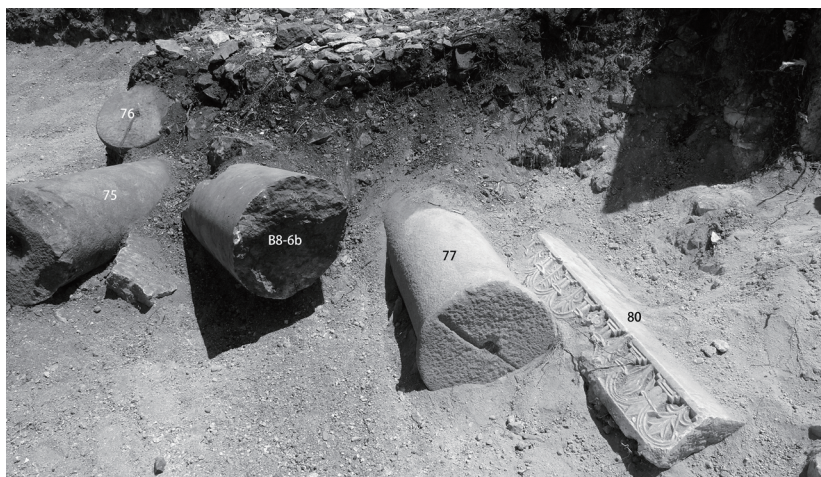


写真 11-2 身廊部と祭壇部の間に倒れていた円柱とアーキトレーフ
(7月28日撮影。南半部。入り口側からアプシス側に向かって。)



写真 11-3 テンプロンのスタイロペイト (?)

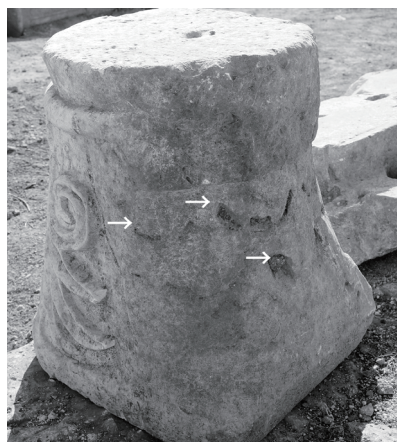


写真 12-1 ビザンツ柱頭 (58)

にくい。それに対し、ビザンツ的意匠のそれらは、四件は円柱の間に見つかったものの、残りの二件（129、145）は、祭壇部 آپシスの近くと、離れた場所から見つかっており、しかも、そのうち一件（129）は八分の程度の破片しか見つからなかった。当初、円柱のすべてはビザンツ柱頭で飾られていたものの、ある時点でビザンツ柱頭が割れるなどし、別の場所に打ち捨てられていたイオニア式のそれと簡素な装飾のそれで置き換えたのかもしれない。これらの柱頭は、ビザンツ柱頭より高さが低いから、後述のアーキトレヴやリントルを上に乗せていたとすれば、単純な置き換えはできなかったであろう。大規模な倒壊などのため短くなってしまった円柱を再編成して再建した際に、高さを十分に残した柱に使われたか、あるいは、柱頭自体の高さの不足を補うため、適当な石材を柱頭と円柱の間に挟んで使われたものであろうか。もはやアーキトレヴを乗せていなかったかもしれない。その一方、創建当初、すべての柱は古代建築からの転用材である柱頭で飾られていたが、崩落の後の再建時、欠損の少なかった二件を除き、ビザンツ柱頭で置き換えたという可能性もある。

ビザンツ柱頭は、高さ四二〜五五 cm、底部の直径

三〇〜四一 cm と大きさがまちまちな上、デザインも幾つかのタイプに分かれる。少なくとも共通の渦巻文を持つ四件（62、63、129、145）は、同じ職人、あるいは同じ工房の手になるものである^③。全体的に言って、太さが五〇 cm 超であったと思われる円柱の上を飾るものとしては小ぶりであり、またいずれもいびつな形状を持っている。個々の柱頭を子細に観察してみると、写真12・1の58番の柱頭については、矢印を施した箇所にも明らかなように、意匠のレリーフが施されていない研磨された面に、研磨以前の彫刻の痕が残存しているものがあるのが見て取れる。これは躯体支持の円柱の上に載っていたのと同じ種類のコリント式柱頭（高さ六五〜七〇、底部直径五〇 cm 前後、上部一辺七〇〜八〇 cm）のレリーフを削り落とし、柱頭をビザンツ時代風の意匠に変えた際の磨き残しと思われる。写真10に示したコリント式柱頭17は、丁度天地を逆にして説教壇の西二 m あたりに置かれていたものであるが、底部のレリーフが、きれいに剥ぎ落とされ、あたかも全体のレリーフを除去する作業の途中であるかのように放置されていた一方、剥ぎ落とされた葉のレリーフは説教壇基壇の脇にまとまって置かれていた。58もそのような加工を経て製作されたものと考えら

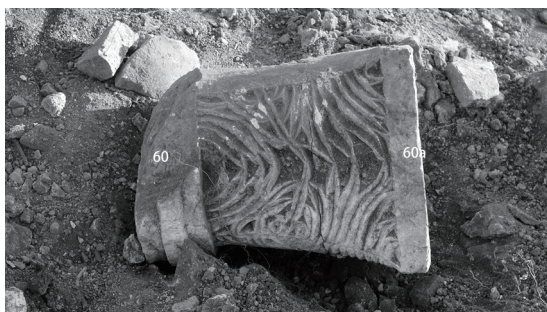


写真 12-2 ビザンツ柱頭 (60・60a)



写真 12-3 ビザンツ柱頭 (129)



写真 12-4 ビザンツ柱頭 (62、63)



写真 12-5 ビザンツ柱頭 (29)

れ、ある部分は削りすぎたり、ある部分は残しすぎたりしたため、いびつな形状となったものであるう。
 コリント式柱頭はそもそも古代建築からの転用材だが、躯体のそれらが落下した後に、それらを再転用してビザンツ柱頭の幾つかが製作されたのなら、テンプレのスタイロバイト付近に倒れていた列柱は、躯体

主要部の崩落後、聖堂の規模を祭壇部付近に縮小して再建した際のものであろう。その一方、聖堂創建時に、躯体の柱頭に使われなかった残余のコリント式柱頭を加工したものである場合は、設計者がアーキトレヴ程度の重量しか支えないでもよい円柱柱頭を小さなそれでよしとし、祭壇部の重要性に応じてその意匠を當代風にアレンジしたものだろう。後者の場合には、製作途中の柱頭17とその破片46が聖堂創建当初から身廊に放置されていたはずはないから、それらは、再建時に不足した柱頭を補うため、躯体のコリント式柱頭を転用する途中、何らかの理由で加工を中断されたものであり、そのほかのビザンツ柱頭とは製作年代が異なるものと考えるべきだろう。とはいえ、聖堂全体を見渡してみると、すべての遺存が確認された、躯体を支えるべき円柱の数一四に対して、コリント式柱頭の遺存数が少なすぎる（北側廊からは一件、身廊からは17を含め三件、南側廊からは現時点で二件の計六件）。このことは、躯体主部倒壊後に、コリント式柱頭のビザンツ柱頭への転用があったという前者の可能性を強く示唆している。とまれ、ビザンツ柱頭の意匠については今後真剣な検討に値する。創建・再建・改築時代の年代決定に資することが期待されるからである。

C 祭壇部内の調度としての円柱 この種のものとして役割が明瞭に思われるのは、それぞれ太さ四一cmと四三cm、長さ二八〇と二九〇cmの、フルートを持たない細めの円柱であろう（78・78a、¹²³）。これらは、発見時には仕切り構造壁の壁に沿って倒れて（あるいは横たえられて）いた（写真13・1・2参照）が、アプシス両脇の壁際、丁度左右対称の位置に飾り柱として立てられていたものと考えられる。柱頭は、テンブロン柱頭として挙げたビザンツ柱頭のうちアプシス近くから見つかった¹⁴⁵と¹²⁹が、これらの柱頭として、最終局面で利用されていた可能性がある。

SC6とSC7の柱台の間、取り除かれた腰高障壁の足下に倒れていた太さ三〇cm、長さ二三〇cmほどの細いフルートなしの円柱64・64aは、評価が難しい（写真3・1参照）。この周辺からは、地方工房のものとしては異色に整った十字架浮彫を刻んだ丁寧な仕上げの四角柱（117・写真13・3参照）や、これまで現れた石板の中で比較的手の込んだ鳥獣や草木、十字架等のレリーフを両面に施された石板（もともとテンブロン、もしくはソレアのパラペットの一群に属したとすれば、間違いなく重要な位置を占めたであろう、幅一三〇cm以上のそれら二件68・72・72a・c・84・84a・146、

110・110 a。後述補論および田中報告参照)の断片などが出土しており、聖堂使用の最終局面において、この区域は特別な一角であったことが示唆される。この円柱は、腰高障壁にびったり接する位置に、南側の外部戸口から入ってくる者にとって、その胴部が、丁度踏み段として機能するように倒れて(あるいは据えられて)いて、そうした設置は、人為的になされたことを思わせる。上で、腰高障壁が取り除かれたのは、この箇所を通路として使用するためではないかと推測したゆえんである。その一方、すぐ近くから一辺四五cmほどの正方形の底面と、直径四〇cmほどの正円の上面を持つ高さ三〇cmの柱座66(写真13・4参照)が見つかっており、それは、もともとこの柱を支えていたものであるろう。また上述の簡素な装飾の柱頭41(写真13・5)はその頭を飾るのに丁度よい大きさである。上述のごとく、聖堂使用の最終局面においては、テンプロンの円柱の上に載せられていたとしても、それが、当初この比較的細い円柱のものであった可能性は排除されない。ともあれ、この円柱は、同じ大きさのものが見つかっていないので、これ以上の憶測は無意味だが、大きさからみて、南翼廊と身廊を繋ぐ内部戸口(SD2)両脇の門柱を構成した可能性がある。このほかには、

アプシスの窓枠を構成したと思われる四分の三柱(151)などが見つかった。



写真13-1 アプシス脇の円柱(78と123。8月1日撮影。入り口側からアプシス側)



写真 13-3 柱座（上 66）と
柱頭（下 41）

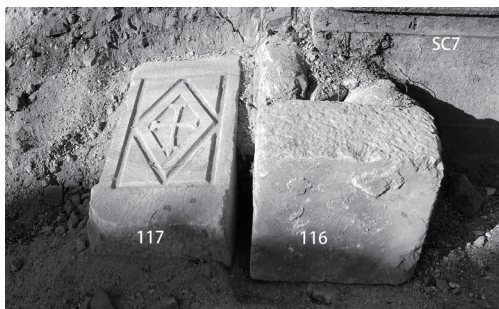


写真 13-2 四角柱（117）

7

テンプロンの円柱を飾ったアーキトレーフ 身廊部

D その他用途不明の柱 らせん溝彫りの入った小円柱の断片（83）や飾り浮彫の入った円柱の断片（88）などが祭壇部、南大黒柱周辺で見つかっているが、現在確認できる断片からは、いずれも完全体に復元できない。そのほかには、浅い凸型のフルート浮彫を持つ太さ六〇cm、長さ一〇〇cm超の円柱のドラムが、列柱台NC6の脇に沿って寝かされる形で発見される一方、おそらくはその続きであったろう部分は、加工や破損の痕を残しつつ、祭壇部の内側、テンプロンの円柱群の下から見つかった（写真14・1・3）。柱頭は、高さ三〇cm足らず、上面の一边が二五cmほどのビザンツ時代の柱頭（写真12・5）がSC5のあたりで見つかっている。SC6とSC7の間に横たわっていた64・64aの頭を飾るものとしては小ぶりに過ぎるように思われるが、半分ほどしか残存しておらず、正確なサイズを知り得ないので、その柱頭であった可能性も否定できない。

から祭壇部にかけて見つけた部材のうちで、最大の点数を数えるのは、ビザンツ柱頭の上に戴かれていたと見られるアーキトレーフ部材である（27、38、40、42、



写真 14-1 柱台脇に寝かされていた柱（上 23）



写真 14-2 祭壇部から見つかった柱片（斜め上 79）

写真 14-3 祭壇部から見つかった柱片（左 112）

43・44、45、55、70、74、80・80a、81、97、153。横断面が逆台形の石板で、奥行きは底面で四五cm、上面で五五cm、長さは多くの場合欠けているのでまちまちであるが、二二cm幅の正面木口には連続するアーチの中に植物文の浮き彫りが施されている。植物文はアーカンスを中心としたそれで、五・六世紀に特徴的なものである。これらのアーキトレヴは創建当時のものであつただろう。その裏面は、幾つかは玉縁飾り文を持っているが、55や97は、表面と同様の植物文を持っていた。55の場合は、裏面の上部を垂直に削り落とされている（写真15・1・2）。一方、42・43は、なぜか裏面を斜めに切り落とされ、奥行きが最大部四五cmから次第に三五cmまで狭まっている（写真15・3）。理由はつまびらかにはえないが、少なくともこれらアーキトレヴ部材が片面を削り落とされてリサイジングされているという事実は、何らかの改築があつたことを示唆する。また、これらのアーキトレヴと並べて柱頭の上に置かれた一連の石板のひとつであろう、正面木口に「+ATEEZQAIIT+」（増大せられること）という碑文が刻まれた、大きな石板の断片（59、59a・f）も出土した。この石材は、写真15・4の左下と右下、矢印の部分に見られるように、扉の心

棒を挿す^{くろあな}枢穴を開けられており、門扉の上に渡されたリンテルの役割を果たしていたと考えられる。



写真 15-1 アーキトレーヴ（上 55 正面、下 55 裏面）



写真 15-2 アーキトレーヴの正面と裏面
（上 97 正面、中 97 裏面、下 81 裏面）



写真 15-3 アーキトレーヴ (43 と 44)

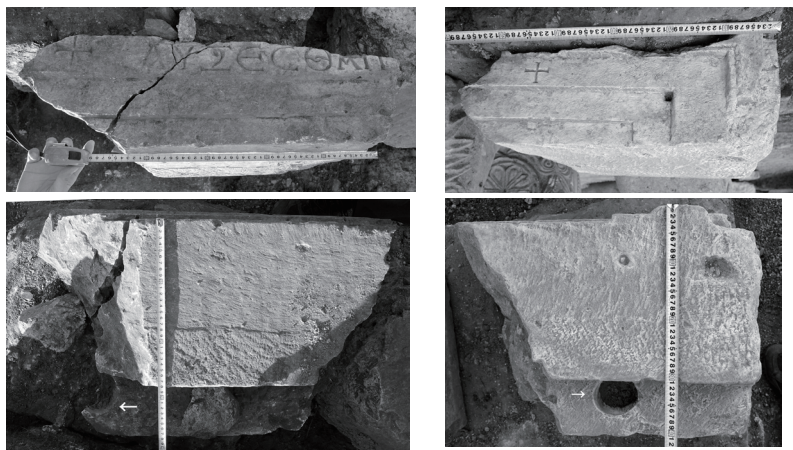


写真 15-4 祭壇部入り口のリンテル正面 (左 59・59a・b、右 59f)

8 アプシース・シントロン

アプシースからは、フレスコの断片や土器片が他の場所に比べて多く見つかった。前者の理由は、アプシースの壁面がフレスコで豊かに飾られていたからである。後者の理由は、シントロン・の土台に盛られていた土が古代の土器を多く含んでおり、それがアプシースの床面上に散乱したものである。シントロンは、わずかに数枚の石灰岩の化粧石板を残したのみで他はすべてはぎ取って持ち去られており、土台を露わにしまっているが、特に北半部では、土台自体も掘り崩され、わずかに二m足らずの幅の煉瓦積み残りの土台を残すのみであった(写真 16・1)。この、残された土台は、その大きさや高さが、北翼廊で見つかった小祭壇

と似通っており、それらと同じ用途に使うためにわざわざシントロンを崩して作ったのかもしれない。

アプシスの床面は、六角形と小さな三角形の薄い石板タイルで舗装されていた（写真16・2）。六角形のタイルは、祭壇部でも一枚見つかっているから、祭壇部も同じ舗装を施されていた可能性がある。こうした装飾は、近隣ではレトオンの聖堂の祭壇部（写真16・3）やクサントスの洗礼堂でも見られる。

まとめ

現在のところ、総合的所見を示すことはできない。現在発掘を止めているレヴェルより下にさらに建築部材が埋まっていることは確実であり、むしろ、現レヴェル以下の遺物の発見状況次第で、聖堂空間の改築・修築・再利用状況等についての見通しも大きく左右されるものと考えられるからである。来シーズンには、残された南側廊から南



写真 16-1 アプシスとシントロン

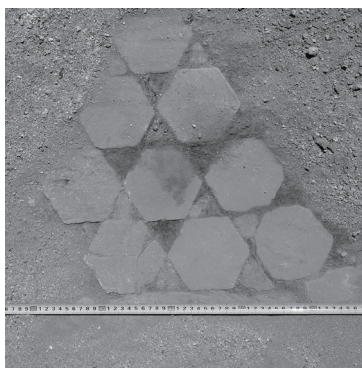


写真 16-2 アプシス床面舗装

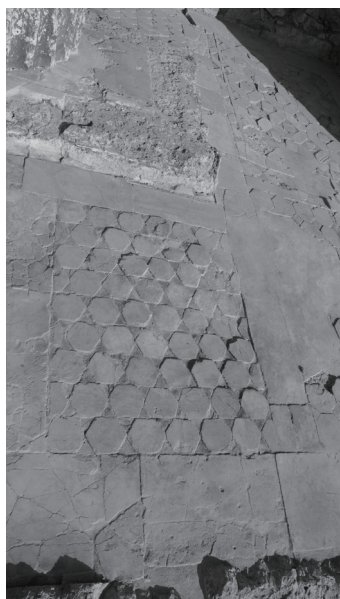


写真 16-3 聖堂の床面舗装
（レトオンの聖堂）

翼廊部の瓦礫除去を行いつつ、幾つかの箇所では、床面モザイクを掘り出し、その保存を試験的に行う予定である。掘り出した後、いかに発掘後の床面を維持するか見通しが立たなければ、床面を白日の下に晒すことは避けるのが賢明であり、来シーズンのモザイク試掘が今後の発掘を継続するか否かを決めると言っても過言ではない。

補論

聖堂の改築年代や放棄年代については、これまで余り手がかりがなかったが、南大黒柱の足下とアプシスでその断片見つかった、元々は 80×130 cm以上であったと考

えられる両面に浮彫彫刻を施された二件の大理石板、とりわけ $68 \cdot 72 \cdot 84 \cdot 146$ とそれらの断片から成る一例（写真17・1）は、ビザンツ柱頭と並んで、この点について重要な情報を与えてくれるかもしれない。すなわち、それは、片面中央に、円環装飾とその縁に沿って走るリボン装飾、さらにその両側に十字架の浮彫を配される一方、その反対面には、大きな菱形と内外に配された大小の円環を「結び目」で組み合わせた幾何学的な帯状装飾の合間に、鳥獣文・六腕星文・花文の浮彫を施されている。いずれもシンプルながらトロス出土の浮彫としては手の込んだ装飾を施されているが、意匠は、それぞれ初期ビザンツと、中期ビザンツの特徴をよく示している。こうした表と裏の両面で、異なった時代に別々の意匠を施されたパネルの類例としては、イスタンブル考古学博物館収蔵の、イスタンブル、ヂャーアローウル地区由来の大理石板（Inv.4388T）が知られる（写真17・2）。ここでは円環装飾文と十字架文を持つ面が六世紀、菱形と円環の帯状装飾文を持つ面が一一世紀から一二世紀のものと同年代づけられている。この浮き彫りでは、帯状装飾に囲まれた空間は、植物文のみで占められているけれども、同じくイスタンブル考古学博物館所蔵で、イスタンブル、アジア側のクチュカル地区から出た、一〇世紀から一一世紀のものとされる浮彫（Inv.6241T）は、両



写真 17-1 大理石板（田中咲子・中谷功治撮影）
（68・72・72a-c・84・84a・146。上：初期ビザンツ、下：中期ビザンツ）



写真 17-2 大理石板 (チャーアローウル。イスタンブル考古学博物館。
上 6 世紀、下 11-12 世紀)

面いずれも帯状装飾文の枠線浮彫を主体とする画面構成で、菱形と円の枠線を持つ片面は植物文で埋められている一方、長方形の枠線を持つもう一方の面は動物文が占める（写真17・3）。トロスの石板の方が、線の表現において生硬であるが、羊とライオンの造形自体は、クチュクヤルのそれと基本的な共通性を示しているように思われる。

もし、以上の観察が正しければ、私たちは、昨年度北側戸口周辺で一一―一三世紀の彩釉陶器が出土したことに照らし、トロスの聖堂が一一世紀以降のいずれかの時期に、大規模な改築、ないし再興を経験したと考えることができるかもしれない。ちょうどセルチュクの到来期であり、そうした時期に、リキアの比較的内陸部でコンスタンティノープルの影響下にある石板が出土しているということも興味深く、今後共、引き続き検討に値する。なお、トロスから発見されたもう一件、これと対になるもう一枚のパネルは、片面には、68〜146の石板の十字架文・円環装飾文と。おそらくは全く同じ浮彫を持つ一方、その裏面には、クチュクヤルの石板に見られるような方形の帯状装飾文の枠線浮彫の中に、鳥の浮彫を施されている（写真17・4）。もう一件にくらべて残存状況が悪いので、意匠について詳細な比較検討は難しいが、やはり、前者が初期ビザンツ。後者が中期ビザンツの意匠を持つものと考え得る。



写真 17-3 大理石板（クチュクヤル。イスタンブル考古学博物館。10-11 世紀）



写真 17-4 (110・110a)

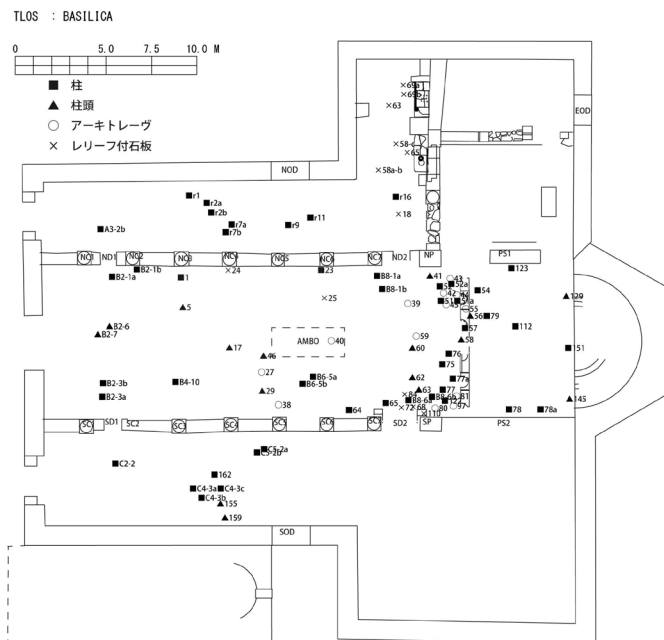


図1 平面図と主要部材の出土箇所（平面図作成：太記祐一）

- 註
- (1) 石材のナンバリングは、発掘順に1から、昨年度赤（以下、番号前にrと表記）で、今年度は黄で行った。なお、地表面に出していたものは一昨年に区画番号を表示した黄による番号付けを行っていたが、昨年度はリナンバーし、今年度は原則していない。
 - (2) 一二年度の発掘参加者は、浦野の他、深津行徳、太記祐一（平面図作成）、草生久嗣、師尾晶子、田中咲子、中谷功治、小笠原弘幸、長谷川起世、松葉香織である。
 - (3) 浦野「トロス司教座聖堂発掘報告（二〇一一）」「史苑」七二・二二〇二年三月（以下、浦野「二〇一一報告」と略記）、一三〇頁、註（3）参照。
 - (4) SC2に当たる柱台は当初から柱礎を失っていた。なお、南側廊部の発掘は途中であるため、SC6とSC7は未だその南面側を掘り出していない。
 - (5) いずれも約四〇cm×約一〇〇cmのフレスコが、それぞれPS2・1の部分と3の部分の二カ所に残る。3の箇所のものはさらに西側に三〇cm×四〇cmほどのフレスコ面が続き、そこには赤と青（緑）で半円状の形象が描かれていたが、乾燥と不注意により失われた。
 - (6) 24cとdに彫られた十字架の浮彫のデザインは、昨年度、北翼廊で発見された方形石板のそれらとよく似ている。ただし、表面仕上げの精度は、後者が圧倒的に高いので、それらが24の石板と一連のものであったとは考えられない。
 - (7) この地点の発掘前地表面レベルは四七二・九九三mで

あった。

(8) 浦野「二〇一一報告」一二一頁以下。なお、そこで、これらの柱は「地場産石製」と見られる旨報告したが、今年度になり土埃が落ちてみると、r1など、灰色縞を持つ高価な大理石(石灰岩)製であることが明確になった。各円柱がどのような種類の石であるか特定することは、これらがスポリア材であるらしいことに照らして、聖堂建設以前に、この場所、あるいは近隣にあった建築物の特定に役立つかもしれない。次年度以降、精査する予定である。

(9) B2・1a・b、B2・3a・bはすでに昨シーズン末掘り上げて石材置き場に移動していた。六件の円柱がそれぞれ乗っていたと推測される柱台は、順に、NC2、SC1、SC2、SC6、NC7、SC7である。なお、昨シーズンの円柱についても、あらためて対応すると思われる柱台番号とともに列挙しておけば、r1(ⅡA3・2a・b)／NC1、r2・r3／NC3、r7a・b／NC4、赤9／NC5、r11a(ⅡA7・2a)・b／NC6、となる。暫定的ながら、NC1から7まで、北側列柱台について、身廊側に倒れていた円柱と合わせすべて対応させえた。柱頭は、昨シーズン、r11a・bの上に乗っていたと見られるコリント式柱頭(r10)が一点のみ、その近くで見いだされていた。

(10) それぞれ対応する柱台はSC1(B2・3の部分?)、SC3、SC4、SC5で、上註での推定と合わせ、南側列柱台についてもすべての円柱が見つかった。

(11) 身廊入り口でもリントルや脇柱は、発掘を止めたレヴェルより五〇cm以上低いレヴェルにまで埋まっについて、床面

(浦野・深津)

レヴェルは確認できていない。B2・6や7も同様だった。(12) イオニア式柱頭は、トロスでは、スタディオンの列柱廊に見られる。

(13) 高さと底面直径の数値は、58(五二cm::三六cm)、60(五五cm::三五・四〇cm)、62(四七cm::四一cm)、63(四二cm::三〇cm)、145(五一cm::三四cm)である。

(14) 写真12・4で、62の柱頭は六腕星文の浮彫を正面に向けているが、上下を正しく置いたとき、この面の、向かって右手の面に渦巻文、左手の面に十字架文を持つ。反対面は無紋であり、また底面近くの縁取りも装飾を施されていない。おそらく彫刻装飾の完成を待たずに使用されたものである。63は、見えている渦巻文の反対面に同じく渦巻文、残りの二面は、十字架文と植物文。129は八分の一しか残っていないので二面しか確認できないが、渦巻文の左隣が植物文。145は渦巻文の右隣が六腕星、残り二面が互いに異なる植物文である。

(15) 同型のドラムは、南側廊・翼廊の外側と、アトリウム部で複数件発見されている。

(本学文学部教授)

Basilica Excavation Report, Tlos 2012 (General Observations)

史苑
(第七三卷第二号)

URANO, Satoshi

In 2012 season, rubbles were removed from the entire area of the nave, the western one-third part of the southern aisle, and the pathway to it. Columns, capitals and the other spolia of the main building, some of which have inscriptions, were discovered all over in these areas as had been in the previous season.

In the nave, some rectangular foundation slabs of the ambon, laid in two rows, were excavated on the axis ca.12.5m distant both from the entrance and from the east end of the nave (separately from the apsis). Some fragments of a triangle panel with double frame lines (24, 24a) and a rectangular panel with a six pointed star framed by a trapezoid relieved (25, 25a-c) were discovered around them both to have consisted of its railings. Six broken columns, perhaps of the templon, exceptionally voluminous as such (ca.50cm diameter and probably more than 3m length; 51-51a, 52-52a, 53-54, 57-75, 77-77a, 122), were found having fallen over one another in the area between main block pillars of the nave. Five of their capitals were also found around them (one Ionic (56) and four Byzantine (58, 60-60a, 62, 63)). Byzantine ones with stellar, botanical and scroll motifs have distorted shapes, probably because they were reshaped from Corinthian ones having been fallen down from the nave-aisle pillars at some point in time. Near the ambon there were found a Corinthian capital (17) having been abandoned on the way of reshaping with some decorative leaves peeled off at its bottom and fragments of leaves within a few meters distant (46-46e).

The base slabs (or stylobate of these columns?) running one meter eastwards in parallel with the line between two main pillars have six strange semi-circular cuttings of ca.60 cm diameter on them (southernmost one is only half extent); the cross section of one of them shows a pan shape (with 4cm depth), while another does a deeper pot shape (with 18cm depth). Supposed architraves of the templon with a series of reliefs of plant motifs were discovered scattering all over around it. Fragments of a similarly shaped slab (59, 59a-f) with an inscription "†AYEEΣΘAI I[--]†" and two axle holes must have constituted the lintel of the door to templon. At least two large railing panels lavishly relieved with stellar, botanical and faunal motives

framed by braids on one side and cross motifs with ivy on the other (h.ca.80cm; w.120-130cm in their originals) are likely to have been those of templon or solea (68, 72, 72a-c, 84, 84a, 136; 110, 110a). The former design is typically found in the middle Byzantine reliefs, while the latter is in the early ones.

In the bema, east of the base slabs, the paving of the apsis floor with hexagonal white and triangular black stone tiles was recognizable. Otherwise, there was not any substantial evidence of the original furniture and ornaments except for two relatively thin pillars (d. ca.40cm; l. ca.3m), their bases, and two byzantine capitals near the apsis; these remains can be thought of as of the last phase. Synthronon, almost all of which step-panels was ripped off and northern half of which was destroyed down to the middle of its filling might have been later converted to one or two small altars. The destruction of the synthronon filling must have made the main body of ceramic shards discovered no other than in this area. Some stone blocks probably having used as construction materials of the apsis wall were found frescoed abundantly; though not a few fragments of frescoes with colours were discovered all over in the nave.

Remarkably, we discovered 50-110cm high wall which entirely separates the southern transept from the nave; which had been beautifully frescoed with a geometric design but was later covered by thick white stucco. Between the nave and the southern aisle, some parts of parapets were found to be removed in contrast with those of the northern aisle.

In the western third part of the southern aisle, there remained another substantial part of frescos with a geometric design on the north face of the southern outer wall. The side entrance to the southern aisle was found later half closed by stones and mortars, but seems to have been used continuously in contrast to that to the northern aisle. In the pathway to it, a bead and a leather cutter were found.